

ム
ク
ノ
キ



西門からクラーク記念館に至るメイン通りの中央に、行く手を遮って聳えるムクノキは、夏は涼しい大きな木陰をつくり、裸の小枝を北風に震わせる冬の季節も風情があつて、今出川校地の数多い樹木の中でも、ひときわ存在感のある巨木である。

もう四十年あまりも昔、大学に入学が決まったとき、家に來合わせていた植物好きの老人が、「明治の末、京都に行つたとき同志社には大きなムクノキがあつたのを覚えてゐる」といつたので、それ以來この木は心にかかるものとなつた。

ムクノキはニレ科の落葉喬木で、高さは二〇メートルにも達する。中部以南に多く自生するが、私の育つた地方では見かけることがなかつたので、よけい関心をもつたのかも知れない。春先淡緑色の花をつけるがあまり目立たず、秋には、ブルーベリー

にも似た紫色の実をつける。

往來の妨げにもなる中央に移植されもせずにあるのは、何か由緒があるうかと不思議に思う人はあつても、紫色の小きな実に関心をもつ人は少なからう。わざわざもいで食べてみた物好きは最近では私ぐらいのものかも知れない。安価な干柿にも似た味で、ほのかに甘い。有終館の北脇にもさらに高いムクノキがあり、晩秋には実をめぐりに群がる小鳥たちがさわがしい。

京都にはムクノキが多い。ざらつきのある葉は、乾燥させて、細工物を磨くのに、今でも使われている。

樹齡百五十年を数えるこの巨木も、最近、幹にウロができたりして老化が進み、手当てを施して、周囲を柵で囲うことになつた。大切に保護して、いつまでも今出川校地を象徴する樹木であつて欲しいものである。

笠井 昌昭

(大学文学部教授)